

【海外留学レポート】

トビタって見えたアメリカの現在

－バージニアの小さな田舎町から－

Understanding the Current American Society by Study Abroad:
From the Small Old Town in Virginia

創価大学 塩田 貴子

SHIOTA Takako

(Soka University)

キーワード：アメリカ、トビタテ！留学 JAPAN

はじめに

皆さんはアメリカ留学と聞くと、どのようなキャンパスライフをイメージしますか？校内をスケートボードで移動するクラスメートや、友人とのアメフト観戦？はたまた、課題が多く勉強が大変そうなイメージを抱くでしょうか？アメリカは大きな国で大学の種類も多いため、地域や大学の規模によって生活が変わってきます。私は、現在1年間の交換留学生として、バージニア州のメアリーボールドウィン大学で勉強しています。バージニアってどこにあるの？と質問されることが多いのですが、アメリカ東海岸の南部にあり、首都のワシントンDCと隣接した州と言えば分かりやすいかもしれません。そのバージニアの中でも、私の大学はスタントンという小さな田舎町にあります。ブルーリッジマウンテンやシェナンドー国立公園など美しい自然に囲まれ、ダウンタウンにはウィルソン第28代大統領の生家やビクトリア建築様式の歴史ある建物が建ち並んでおり、アメリカの古き良きオールドタウンといった感じでしょうか。アメリカに留学するなら大都会で学びたい！と思う方も多かもしれませんが。私自身も東京で生まれ育ったこともあり、都心の便利さや魅力にも魅かれ、留学先を選ぶ時に悩みました。しかし、今はあえて田舎で勉強する魅力がたくさんあると胸を張って言えます。私の体験談が、皆さんが留学に行きたいと思う一つのきっかけや留学先を選ぶ上で参考になればとても嬉しいです。



スタントンの街並み



メアリーボールドウィン大学

リベラルアーツ大学のススメ

私が留学先のメアリーボールドウィン大学を選んだ一番の理由は、リベラルアーツ大学であることです。総合大学が多く学部を持ち、生徒数も多く、大都市にあることが多いのに対して、リベラルアーツの大学は、学生数も大学の規模も小さく、田舎にあることがしばしばで、幅広い学問を学ぶことができるのが特徴です。英語のネイティブスピーカーに囲まれる環境で学びたい、自分の持っている知識だけでなく、広い視野から物事を見ることができるようになりたいとの思いから、交換留学先のリストの中でアメリカにあり、かつ学部を選ぶ必要のないこの大学に決めました。小さな大学のメリットは、学生と教授の距離感が近く親身になって質問に答えてくれることです。また、クラスのサイズも大体15~20人程度と小さいので、ディスカッションへの参加や発言もしやすいと思います。そして学生が勉強に集中できるよう田舎にあるケースが多いのですが、都心から外れているので日本人も非常に少ないです。ほとんどのクラスでアジア人は私のみ、という状況になりますが、その分アメリカ人の学生とコミュニケーションを取る機会が多いので友達を作るのも難しくなく、英語力を伸ばすにも良い環境です。初めの頃は、私も現地の学生の議論のスピードや、積極的な態度についていけず黙ってしまうこともありましたが、伝えようとすれば必ず聞いてくれることに気付き、徐々に発言もできるようになりました。今では言いたいことは言う、という姿勢が身につけてきたと感じます。

アメリカ留学生活～授業編

上記でも説明したように、私の留学先はリベラルアーツの大学であるため、学部は存在せず様々な分野の授業を履修することができます。私は日本では法学部に所属していますが、こちらでは関心のある社会学・経営学・国際政治等を幅広く学んでいます。例えば、「アメリカ外交政策」という国際関係学の授業では、キューバ危機やベトナム戦争に代表されるような過去にアメリカ政府が下してきた歴史的に重要な外交政策の決定がどのようにされたのかを分析します。このクラスの面白い点は、ほぼ毎回の授業でトランプ大統領の話題があがることです。トランプ支持者は南部に多い傾向があるとされていますが、バージニア州は南部と言っても北部との境に位置しているせいか、クラスメートの

大多数はトランプ大統領に対して批判的です。今の混沌としたアメリカ政治について、現地の学生と意見を交わせることはアメリカに留学しているからこそその経験だと思います。クラスで唯一の外国人留学生として、日本の立場を聞かれることもよくあります。とある日、クラスで第二次世界大戦について学ぶ講義があった際には衝撃的な体験をしました。アメリカが日本に原爆を投下したことは外交政策として正しかったのかが議題になり、多くのアメリカ人学生が賛成したことです。彼らは歴史の授業では、どれだけの日本人が犠牲になったのかは学ばず、原爆の投下が戦争を終結させアメリカが戦勝したという事実のみを学んだと言っていました。一つの歴史上の出来事も、国によって生徒が教わる内容も視点も全く異なるのだと気づかされました。中には日本人のことが嫌いだと直接伝えてくるクラスメートもいましたが、国籍は関係なく彼女と友人になることを目標にコミュニケーションを続けていった結果、「昔の日本は嫌いだけど今の日本人は嫌いじゃない」と伝えてくれるようになりました。これも留学を通して、異なる意見や多様な価値観を受け入れる姿勢を学んだおかげだと思います。

他にも「人種」というインパクトのあるコース名がつけられている社会学の授業を取っており、このクラスもアメリカならではの視点が豊富で興味深いです。アフリカの歴史を遡ることから始まり、どのように人種問題が生まれ今に至るまで続いているのか、現代のアメリカ社会に焦点を当てて学んでいます。人種差別は過去の話だと思う人もいるかもしれませんが、昔と形は変われど今まさに起きている問題なのだとアメリカで生活する中で感じます。メアリーボールドウィン大学はアフリカ系アメリカ人の学生の割合が高く、授業中に白人と黒人の生徒の間で議論が白熱しすぎてしまうこともしばしばです。未だに対立があることも事実ではありますが、人種にかかわらずこの問題をどう変えていくかを一緒になって話し合うクラスメートたちの姿に、アメリカ人が持つ多様性を大切にする心や違いを受け入れる強さも感じさせられます。

全てのクラスに共通して言えることは、課題の量が非常に多いということです。履修するクラスの数は一学期あたり4つか5つなので、日本に比べると楽そうに見えるかもしれませんが、毎週200ページのリーディングや2つ以上のレポート課題など、テスト期間に限らず勉強に集中する必要があります。正直大変だと思うこともありますが、内容を理解し自分の頭で考えることを求められるため、試験が終わったら全て忘れてしまうような学びではなく、今後にも生きる有意義な勉強ができていると思います。

アメリカ留学生活～文化編

勉強だけでなく、異文化を知り体験することも留学の醍醐味です。大学でも様々なイベントが開催されるのですが、特に印象に残っているのは100年以上前から伝統的に行われてきた舞踏会に参加したことです。大学3年生のみが招待され、成人と認められる21歳になったことを祝して、家族を招待

し感謝を伝えるためのイベントです。正式なパーティーに参加するのは初めてでしたが、家族を大切にするアメリカらしい文化を感じることができました。他にも、秋には授業が休校になり皆でリンゴを収穫してフードバンクに寄付する「アップルデイ」というイベントや街全体をハリーポッターの世界そっくりにしてしまう「ハリーポッターウィーク」という地域イベントなど、日本ではできない貴重な体験を楽しみました。さらに、私の大学では留学生がアメリカの一般的な家庭の暮らしを知ることができるよう、一人ずつにアメリカ人家族がついてくれるフレンドシップファミリーという制度が設けられています。夜にキャンプファイヤーをしながら星空を眺めたことや、アメフトの試合と一緒に観戦したことはとても良い思い出です。また、11月にあるサンクスギビングという祝日の際にもお家に招待して頂き、伝統的な料理を一緒に作ったり、親戚が集まったりしたことはまるで日本のお正月のようでした。

海外で生活することは、異文化を知ると共に自分の国の文化について知る機会にもなると思います。私の大学ではほとんどの学生が寮生活をしており、私もアメリカ・韓国・台湾・インド出身の学生と一緒に暮らしています。それぞれの国の料理を一緒に作ったり、互いの文化を紹介する国際ショナルフェスティバルを開催したりと、日本について披露する機会も多くあります。アメリカに来たことで、日本人としてのアイデンティティーを意識する機会や自国の文化を誇りに思うことも増えたと感じます。



舞踏会にて友人と



ハリーポッターウィークの様子

課外活動編

アメリカに留学中であることを利用して、学外での活動に参加するのも留学を有意義にする一つの方法です。例えば、関心のある問題についての国際会議やイベントに参加することもそうでしょう。先月の3月には、ニューヨークの国連本部で行われた「国連女性の地位委員会（CSW）」というジェンダー不平等の問題を扱う会議の一環として、世界中から約200人の若者が集まり、各国の問題について話し合い、国連に対して政策提言を行うイベントに参加しました。日本からではニューヨークに行くのに時間もお金もかかるため、この会議に応募しようとは考えもつかなかったと思います。結果的に参加したことで、世界中で女性が直面する課題について理解を深めることができただけでなく、専門家の方たちとの繋がりもでき、今後のキャリア形成の上で参考になるお話も多く聞くことができました。アメリカでは、分野に関わらず世界中から優秀な人材が集まって会議が開かれることも多いため、留学期間中は自ら積極的に機会を見つけてチャレンジする姿勢を持つことで様々な経験を積むことができます。また、これから留学に行く皆さんにぜひお勧めしたいのは旅に出ることです。私の大学では秋休み・冬休み・春休みなど休暇の度に寮が閉まってしまうので、アメリカ国内や周辺の国を旅行して回りました。アメリカは大きな国ですので、東海岸と西海岸、北部と南部など地域によって人々も景色も全く違います。バージニア州は緑が多く、冬は雪が多く降る地域ですが、冬休み中に旅行したカリフォルニアでは一面岩だらけの砂漠に圧倒され、フロリダは真冬でも暖かくヤシの木が立ち並ぶビーチが印象的でした。特に行って良かったのは、一人で訪れたメキシコです。アメリカとメキシコはとても近いので、国内旅行をする感覚で行けます。しかし、やはりアメリカとは文化も言語も違います。グアナファトという首都から少し離れた街を訪れたのですが、世界遺産にも指定された美しい街並みや、本場の歌と踊りを楽しんだり、メキシコ料理を食べたり、一週間という短い滞在期間でメキシコが大好きになってしまいました。同世代のメキシコ人と友人になり、アメリカの政治に対して議論を交わし合ったのも良い思い出です。現地の方に英語が通じず困ったこともありましたが、たどたどしいスペイン語でも積極的に話しかけたり、グーグル翻訳を使って交流したり、何事もやってみればどうにかなるものだと感じ、この旅行を通して一回り成長できた気がします。



国連にてユースのイベントに参加



グアナファトの街並み

トビタテ！留学 JAPAN について

留学を考えている人の中には、費用がかかることを理由に踏み出せない、という方もいるかもしれません。私も留学先で様々な挑戦をしたいけれどお金もないし、と思っていました。そんな中見つけたのがトビタテ！留学 JAPAN です。これは文部科学省と民間企業が協働して留学したい！という情熱をもつ日本の学生を応援する、官民協働のもと社会総がかりで取り組む「留学促進キャンペーン」です。28日の短期留学から最長2年までの長期留学を対象としており、授業料や渡航費の一部を負担して頂けることに加えて、毎月の奨学金が支給されます。本奨学金を受給するためには、書類審査とプレゼン・面接審査を経て受給者に選ばれる必要があります。渡航先も留学期間も自由で、自分で留学計画を立て、留学先で何をして将来にどう活かしたいのかをアピールするのですが、大学の成績等に関わらず学生の熱意や好奇心、留学計画の独自性が評価されるのが特徴です。私も「女性のエンパワメント」を授業と現場で学ぶことを計画の軸に定め、情熱を伝えた結果トビタテ！留学 JAPAN の6期生に選ばれることができました。交換留学を終えた後には、ニューヨークで女性や難民の権利保護の業務に携わるインターンシップを行う予定です。トビタテ！には、日本を変えたい、世界を面白くしたいという大志を抱いて、それぞれの分野で挑戦している仲間が多くいます。経済的な面で留学を支援して頂けるのみならず、彼らと出会えたこと自体が私にとって価値のある出来事でした。トビタテ！留学 JAPAN のみならず、留学を支援する奨学金制度は多く存在するので、留学したいという情熱を持っている方は、ぜひあきらめずに挑戦して行って頂きたいです。

おわりに

アメリカでの留学生生活を始めてから7か月以上が経ちましたが、留学に来て良かったと心から思うことが何度もあります。初めは英語力を向上させたい、というのが留学の動機でした。しかし、それだけでなく様々な国籍やバックグラウンドを持つ友人との授業や共同生活、知らない土地への旅行などの経験を通して常識に捉われない考え方や差異を受け入れることができるようになったことが自身にとって大きな成長であると感じています。留学は、新たな価値観を知り視野を広げると共に、自国文化が持つ独自性や自分自身の個性と向き合う期間でもあります。人生はよく旅に例えられることがありますが、留学が私の人生における新しい旅の出発地点になったことは間違いありません。皆さんも、留学というあなたの可能性を大きく広げる新しい旅へと一歩踏み出して行ってください。